

## 映画『嗚呼、満蒙開拓団』——そして、その先

千本 健一郎

かつて日本の国策で満州（現中国東北部）や内蒙古に入植した「満蒙開拓団」。二十七万にのぼる開拓民のうち七万人余が日本の敗戦前後、北満の地で命を落としたとされる。生きのびた人々は残留孤児、残留婦人としてそれぞれ中国人の養父母に引きとられ、あるいは現地中国人の妻となつて歳月を重ねた。この記録映画のなかでそうした生存者が語る戦中戦後の体験は、一つひとつが身を切るように響く。

一九四五年八月八日、ソ連の参戦とソ満国境侵攻を機に、それまで国境の最前線で農業に励んでいた開拓民は、たちまち家と土地を捨てて逃げまどう難民と化した。

戦争末期、開拓村の働きざかりの壮年男子はすでに軍に召集されていた。逃避行を強いられたのは女、子供、老人を母体とする開拓団員の群れだ。彼らはソ連軍の攻撃と現地中国人の報復のなかで襲撃や殺戮にあい、集団自決を選ぶ。毛布と水とビスケットだけを残して、幼児を草原に置き去りにする。あげく自らも飢えと寒さと発疹チフスに倒れる……。

画面からは、こうした「血だらけの逃避行」を今に語る人々の声が次つぎ現れる。なかでも私の耳を打ったのは終戦時にチチハルの満鉄検車区で働いていたという男性の証言だ。

チチハルの駅頭には、ほとんどリュックひとつで国境付近の開拓地からたどりついた難民たちがひしめいていた。そこで雨露をしのぎ、避難列車を待っていたのだ。「僕は、てっきりその人たちを乗せるために列車を編成したと思っていた。ところがそこに兵隊が銃剣をつけて、それに守られて、家族の人たちが乗るわけです。将校とか高級軍官の家族だと思ふんですよ。それが、荷物がすごいんですね。革のトランクを二つ持ったり、布団袋を積みこんだりして、その連中が乗って、その次の列車もたしかそういう連中が乗ったんですね。……それで後から考えてみたら、まず軍の人たちが先に行って、その後に満鉄の人たち、それから満州国政府の人たちが乗って、ハイラルや満州里マンチュリの方から逃げてきた人たちは結局、一部しか乗れなかったと思ふんです」

ここには、あからさまな流血の惨事はない。だが、軍や官吏、満鉄を頂点とする日本の傀儡国家をつくり上げ、危急のときにはその防人役に任じた開拓民をあっさり捨て去る国家意思が、無残なほど現れている。人間の生き死にに、歴然と等級がもうけられているのだ。当時、関東軍（旧満州に駐屯した日本軍）の主力は沖縄に送り出されており、同軍の防衛線は南下が進んで縮小されていたが、「軍機密」として開拓民はじめ一般の人には知らされていない。背後にはそうしたこともある。

この映画（監督・羽田澄子）はハルビン市郊外の方正<sup>ほうまさ</sup>地区で生き残った日本人の体験談が軸になっている。方正県に行けば関東軍がいる。軍の補給基地がある。そこまで行けばハルビンにいける。ハルビンに出れば日本に帰れる。そう思って人々はひたすら方正を目指した。だが関東軍は人々を無視して、とっくに立ち去っていた。そこで人々は飢えと寒さと伝染病で死骸の山を築くことになる。

一九六三年春、食糧危機に見舞われた中国政府は国民に荒地を開墾し自力で食糧を求めるよう命令を発する。中国人と結婚した残留婦人・松田ちよさんはその土地を耕すうちに続々現れる白骨の群れと出会った。四五年秋から翌年にかけて亡くなった日本人たちの遺骨だ。松田さんはその骨を埋葬したい旨、県政府に願い出た。この願いはそこから省政府、中央政府へとわたり、当時の陳毅外相の手を経て周恩来首相のもとに届いた。周は「祖国を見ることなく逝った開拓民たちも日本軍国主義の犠牲者である」として約四千五百人の死者たちを葬る「方正地区日本人公墓」の建立を認めた。高さ三・三メートルの墓石用の花崗岩探しも、碑銘の文字を記す書家も、そのほか墓の建立にかかわる費用一切も、すべて中国側が引き受けた。これが中国ではまだ日本の侵略に対する恨みが消えていない一九六三年、日中国交回復の十年ほど前の出来事と知らされて、思わずうなった。周恩来という政治家の度量について、だ。

周の存在感はそれだけではない。六六年から中国全土をおおった文化大革命のとき、紅衛兵たちがこの日本人公墓を破壊しようとした。だが黒龍江省政府は「これは日本軍の墓ではない。日本の庶民の墓である。彼らに罪はない」と紅衛兵の要求を退けた。

そしていま墓参の途次、ハルビン市方正県人民政府に表敬訪問したかつての難民たち——今は日本に帰国している——に向かって、劉軍常務副県長はこう言うのだ。

「日本が中国を侵略したとき、とても許し難い残虐なことを中国にしました。……これは歴史の事実です。しかし、開拓団は日本兵ではありません。当時の日本の政策がなければ、彼らは中国に来なかったと思います。中国に災難をもたらしたのは、開拓団の人の考えではありませんでした」

周恩来の政治的寛容がここまで連綿と生き続けていることに、改めて舌を巻く。だが私たち日本人は、中国側のこうした発言にすんなり同意していいものだろうか。また国策にだまされた側は、ただ過去の悲劇を嘆き、大陸の大地に死体をさらした物語を語りつくせば事足れり、ということか。戦いすんで日が暮れて、日中間にも平和が回復し、といった時点で旧地を訪れ、かつての苦難をしのび、慰霊塔に向けて手を合わせればすむものなのだろうか。

私はここで数多の犠牲者やかつての難民たちを非難したりおとしめたりする気はさらさ

らない。彼らは力尽きて死んだ。あるいは生き残って痛切な被害の歴史を精いっぱい語り続けている。ただし、平和を祈念するところで話を打ち切ったら彼らも私たちも浮かべられないような気がする。そこから先を一步でも掘り下げて考えるのは、彼らが命がけで残した平和をいま享受しつつある私たちの当然の役目というものだろう。

さしあたって二つのことに思いをはせておきたい。その一。私たち日本人は入植活動を通じて、結果的にはまるごと中国人に対して加害者になったこと。その事実を自覚的に受け入れること。

一九三六年、広田弘毅内閣は満州移民計画を立案。背景の一つに、二九年の世界恐慌のあおりで生糸の価格が暴落、養蚕によって生活を維持していた農家が困窮に陥った、という事情がある。加えて、増え続ける農村人口を調整しなければならないという要因もあった。以上の農村対策として、満州へ二十年かけて百万戸・五百万人を送り込むという国家プロジェクトが描かれたのだ。

その入植地を確保するために、政府は現地中国人農民が開墾した土地を二束三文で買ったとき、開拓民に割り当てていった。これにより入植者たちは日本では考えられなかった広大な土地を手に入れ、「王道楽土」「五族協和」の国策スローガンのもと自らの「<sup>いやさか</sup>弥栄」のためにクワをふるい、牛馬を動かし、満蒙の地を支配した。一方、自分の土地を追われた現地農民は開拓団員の小作人になってしまった。この事実を無視するか忘れるかして、昨日までの土地の主たちが四五年八月九日以後、突然「<sup>(註)</sup>犬にも劣るどん底に落ち<sup>(註)</sup>」たという実感ばかりつものらせるとしたら、これは危うい。目の前の難儀が何故もたらされたのか。自らの加害性に対する省察がないところ、いきおい被害者意識ばかりがはびこり、あつという間に肥大化する。

こうなるともはや、他者の境涯への想像力がはたらく余地はなくなる。行きつくところお人よしの無告の民は、またしても無自覚、無反省な民として「お上」の意のままに操られるだろう。そして同じ悲惨を味わい、嘆き節を奏で……という底なし沼をはい回ることにもなりかねない。

その二。したがって貧しい者、弱い者ほど「お上」からはだまされやすいものだ、と肝に銘じること。だまされる、とは、上からの美辞麗句におどらされ、力ある者の都合が悪くなれば放り出される、というのと同義だ。自国の貧しい者、弱い者を、他国の同列にある者を虐げる先兵として使う。これはお上の常套手段だ、くらいの用心深さはもちたい。そうして、簡単には上意にまるめこまれない民がふえていったとき、「よるべのない、きのどくな者」を意味する「無告の民」という言葉は、はじめて影がうすくなるのではないか。

そういえば、手もとにある『中学生の満州敗戦日記』（今井和也著、二〇〇八年、岩波ジュニア新書）という本の最後にこう書いてある。

「『満州国』はそこに住む人たちの存在、意思、感情を無視した、ひとりよがりの妄想から生まれた国家だった。血と涙をたっぷり吸いこんだ砂の上に組み立てられた幻想国家がわずか一三年五カ月の寿命に終わったのは、歴史の必然というほかはない。

そして『満州国』の経営に無惨な失敗をした指導者たちの名を、ふたたび、私たちは戦後の日本国経営の指導者の中に見出すことになる」

これと関連して、次のような記述も目をひく。東京からも送り出された満蒙開拓団の一枚の歓送写真を見て、その筆者は仰天した。

「……戦時下企業整理などで店を閉じた商店街の人々を、万歳で送り出しているのは、岸信介商工大臣と、後に岸内閣の外務大臣となる藤山愛一郎東京商工会議所会頭の姿だったからだ」

こう記したのは井出孫六。『終わりになき旅 「中国残留孤児」の歴史と現在』（岩波現代文庫）の著者でもある。

権力者は過去の汚点については口をぬぐったまま。それについて証言するのは、いつも汚点に振り回された「民草」ばかり。これが続くかぎり、民の歴史のその先に光がさしてくるとは考えにくい。

この走り書きにも似た「感想文」は、十歳のときやはり「引揚難民」として旧満州・奉天（現瀋陽）から帰国した私の心情が下敷きになっている。日頃は雑事にかまけて「満州」から遠く離れて生きる身の、苦い反省もこめて書き進めた。

（2009年夏）

参考資料『嗚呼 満蒙開拓団』（EQUIPE de CINEMA No. 171）

井出孫六・前掲書

方正友好交流の会 会報8号『星火方正一燎原の火は方正から一』

注 井出孫六・前掲書所収、坂本龍彦『『終わりになき旅』に寄せて』

（せんぼん・けんいちろう：ジャーナリスト。元『週刊朝日』記者、『朝日ジャーナル』編集委員。文化、差別問題などを担当。著書に『『いい文章』の書き方』、編著に『世界のこ とば』、訳書に『イスラエル全史』（上下）ほか。